

琉球大学学術リポジトリ

大学教育学会課題研究集会に参加して

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/42288 |

大学教育学会課題研究集会に参加して

法文学部助教授

野 入 直 美

99年の11月27日から28日まで京都の立命館大学で行われた大学研究学会の研究集会は、いかにして他大学が21世紀への生き残りを模索しているかを知る貴重な機会になった。中心的に取り上げられたのはFD（大学教員の資質開発）活動とインターンシップの導入にであり、それぞれについて具体的な事例が紹介された。

FDは、18歳人口の減少を背景とする大学教育の危機の時代であって、大学の組織的な企画運営を押し進める動きの中に位置づけられるようになってきた。文部省は今年度、FD予算請求をした大学に予算配分をし、例えば、千葉大学には280万円のFD予算がついている。ある種トップダウン的な、予算がつくから取りまざるを得ないという状況とともに、各大学の生き残りをかけた自発的な模索も行われている。国立大学の3割、私立大学の2割が何らかのFD活動に着手しているという。

立命館大学では外国語と一部専門科目において、オープン・クラス・ウィーク（公開授業週間）が設定されている。まずFD事務局が授業の公開を希望する教員を募り、それをまとめて案内を配付し、見学を希望する教員からの申込を受けつける。見学者は感想を授業公開をした教員に出すという仕組みである。教員の自発性を尊重し、教員が学生、職員とともに教育・研究共同体をつくるためにFDが活用されているとのことだった。一方、千葉大学のFD活動では「普遍教育（共通教育）学生会議」が特色をなしている。2回目の会議では学生60人と教員40人が集い、学生が教育に関する率直な要望や意見が出された。教員の「普遍教育改善研修会」には学生の要望が持ち込まれ、活発な議論が行われた。学生の不満を「甘え」と切り捨てる教員と「教育側の問題」とする教員との

意見の相違が「今後のFD活動の推進力になる」と位置づけられているのが印象的だった。

インターンシップについて、立命館大学では法学・経営・政策科学・国際関係・産業社会学部で導入しており、法律事務所、吉本興業、国際協力推進協会、佐川急便等が学生を受け入れている。全日程10日間で、まず企業の担当者が大学で講義をし、受講生が視察と就業を行い（原則的に無給）、最後に学生の目から現場への提言をする形などがある。学生アンケートによればほとんどが現場の体験に刺激を受け満足しているが、「大学での講義との関連がなかった」という指摘が今後の課題であろう。学生を受け入れている企業として、三洋電機の人事部の担当課長からの問題提起があった。入社3年以内の離職率3割という状況に照らして、企業にも目的意識を持った人に会社に知ってもらうニーズがあるが、海外からのインターン生が①半年から1年と長期で②明確な専門性と目的意識をもつものに対して、日本の学生は①短期で②目的が漠然としていることもあるという。それでも5、6人のインターン生をホームページで応募すると40人以上の申込がある等学生からのインターンシップへの要望は大きい。インターンシップは理系学部が先行してきたが、例えば、パークレー大学では文学部の学生が刑務所でシェイクスピアの朗読をして文学の役割を考える企画があり、文系学部にもさまざまな試みを行う可能性があると思われる。

今回の研究集会で取り上げられたFDとインターンシップは、どちらも日本では導入期の模索が行われている段階である。教員への管理や負担増になる危険性もはらんでいるが、自発的な取り組みによって、大学教育を活性化している事例に学ぶべきことは多い。